

第57回 日本生殖医学会

2012.11.08-09. 長崎

当院で施行した Klinefelter 症候群の TESE14 症例の検討

姫野隆雄 前澤忠志 大西洋子 井上朋子 伊藤啓二郎 中岡義晴 森本義晴

(IVF なんばクリニック)

【目的】 Klinefelter 症候群は、無精子症患者の約 10%に認められる 47,XXY を基本とする性染色体異常である。精巣内で精子形成が認められなければ挙児不能となるが、精子が回収できればその精子は正常染色体男性と染色体異常率に差がないとされている。今回当院で TESE を実施した Klinefelter 症例について臨床的検討を行った。【方法】 2006 年から 2011 年までの 6 年に当院で施行した micro dissection TESE170 例のうちの Klinefelter 症候群 14 症例について検討した。【成績】 Klinefelter 症候群の核型 はすべて 47,XXY の非モザイク型であった。14 症例中 7 症例(50%)に精子が回収できた。全体および精子回収の有無についての症例検討では、男性年齢 26~45 歳 (平均 36.2) (精子有 : 平均 36.1、無 : 平均 36.7)、血中 FSH 値 27.7~68.6mIU/ml(平均 44.7)(精子有 : 平均 46.6 無 : 平均 42.0)、血中テストステロン値 1.44~5.16ng/ml (平均 2.95) (精子有 : 平均 3.14、無 : 平均 3.31)、精巣容積 1~6ml (平均 2.9) (精子有 : 平均 3.2、無 : 平均 2.6)であり精子の有無において全てのパラメーターで有意な差は認められなかった。精子を回収した 7 症例のうち 6 症例に IVF を実施した。採卵 8 周期、ET9 周期実施し、妊娠陽性が 3 例(33.3%)であり、そのうち正常出産 1 例、妊娠 9 週まで正常発育が確認できた症例が 1 例、流産 1 例であった。【結論】 非モザイク型 Klinefelter 症候群においても 50%の症例で精子回収は可能であった。3 例 (33%) に妊娠が成立し、少なくとも 1 例(11%)は正常児が得られた。臨床所見では精子採取可能かどうかの判断はできないことがわかった。